

農林中金総合研究所への出向を振り返って

農業・農村領域 主任研究官 草野 拓司

1. はじめに

私は官民人事交流により、2019年4月から21年3月の2年間、株式会社農林中金総合研究所（以下、「農中総研」）に出向しました。同社では調査第一部組合経営班の一員として、我が国の農協経営に関する研究業務などに携わりました。

私が農中総研に出向する以前、農中総研と当所による人事交流は3度行われており、当所からの出向者は、いずれも我が国の食料・農業・農村・農協に関する知見を備えた専門家でした。ところが、私の専門はインドの農業政策や農村経済研究であり、我が国の農協経営などについての知見は持ち合わせていませんでした。また、インド研究を一人で担っていたことから、チーム単位で取り組む経験も多くはなかったため、不安を抱えたまま、この出向が始まりました。

2. 主な業務の紹介

(1) 農林中央金庫向けのレポート作成業務

農中総研は農林中央金庫（以下、「農林中金」）のシンクタンクであるため、農林中金への情報提供は極めて重要な業務となっています。私が携わったのは、「農協利用者版金融行動調査」「農業メインバンクにかかる顧客満足度調査結果」「情勢報告 JAを取り巻く環境見通し」などのレポートの作成です。

例えば、「情勢報告 JAを取り巻く環境見通し」では、最新の経済・金融情勢、他金融機関の動向、農業・JA経営などを取りまとめます。そのために、調査第一部のメンバー全員に担当箇所が割り当てられます。

この業務は、農林中金のニーズに応えた情報を提供することに加え、最新情報を提供するためにスピード感も求められます。調査第一部の十数名がメンバーとなるので、チームワークも必要です。

このレポートの作成において、私はJAの組織・事業の推移（19年度）、我が国の農業政策（20年度）を担当しました。前者では「総合農協統計表」などを、後者では「食料・農業・農村基本計画」など読み込み、レポートの作成を行いました。

(2) 研究業務

上記業務に加え、各研究員がテーマを決めて進める研究業務があります。私が取り組んだのは、「農協による援農ボランティア」（19年度）、「農協による農福連携」（20年度）です。これらの研究を

進めるため、全国の農協でヒアリング調査を行い、その成果を農中総研の機関誌である『農林金融』などで発表しました。

中でも特に印象に残っているのは、JAながさき県央による農福連携の取組です。同JAでは、高等特別支援学校の学生に実習の場を提供し、それを経験した学生の中から数名を毎年採用するという取組を行っています。私は現場を訪れ、Aコープで実習に取り組む学生の姿を見ました。販売に携わる学生たちは集客のために必死に声を出し、引率の先生も懸命にその手助けをします。JAの職員はそれを見守り、時にはアドバイスを送ります。この実習を経て、学生が同JAに就職することになれば、他の企業等に就職することもあります。この実習は、同JAが学生を採用することだけを目的としているではありません。実習を通して、障害者がしっかり働けることを地域社会に示すことも、大きな目的となっているのです。

3. おわりに

最初に述べたように、農中総研での業務は、当所でのものとはまるで異なったことから、出向中は不安を抱えつつ、新たなことへの挑戦が続きました。それゆえに、多くのことを学び、様々な知見を得られた期間でもありました。

農林中金向けのレポートを作成する際には、リーダー（部長・副部長・部長代理）が風通しの良い環境を整えてくれたことでチームとしての一体感が生まれました。相談もしやすいことから、効率的かつ迅速に仕事が進んでいきました。これらが、リーダーのあり方やチームワークの重要性などを学ぶ機会となりました。また、この業務により、我が国の農協や農政に関する理解を深められたことも、今後研究を進める上で、意義深いものでした。さらに、研究業務を通して、地域社会における農協の影響・役割・可能性の大きさなどを再認識する機会にもなりました。

おそらく、インド研究だけが続けていたのでは、以上のような知見は得られなかったでしょう。このような機会をいただいた農中総研のみなさまに加え、私の出向に関わっていただいた全ての方々に感謝申し上げたいと思います。そして、今後の私の研究をより充実させていくことで、お世話になったみなさまへの恩返しができればと思っています。